

伊丹潤の言説における住宅に関する思想

—朝鮮の集落・民家に関する思想から現代の住宅に関する思想まで—

The Theory on Houses in the Discourse of Jun Itami
- From the Theory on Korean Villages and Houses to the Theory on Contemporary Houses -

○後藤 沙羅^{*1}, 末包 伸吾^{*2}, 増岡 亮^{*3}
GOTO Sara, SUEKANE Shingo, MASUOKA Ryo

This study extracts the thoughts on housing from all the currently available discourses of architect Jun Itami (1937-2011) and analyzes them by keywords. His ideas on housing range from those on Korean villages and private houses to those on modern houses. His theory on houses is classified into two categories [Korean villages and houses] and [Contemporary Houses], and each category has sub-concepts. This study clarifies the background of his thinking on housing and what possibilities he saw in housings and provides a new perspective on his thinking on housing in the contemporary architectural world.

キーワード: 伊丹潤, 言説, 住宅, 思想
Keywords: Jun Itami, Discourse, Houses, Theory

1. はじめに

1.1. 研究の背景

戦後の日本における住宅に対する思想は、時代とともに変化しながらも、今日に至るまで多くの建築家や評論家たちの思想が、言説や作品を通して表現されてきた。それは時に国家という枠を越えて参照されることにより、互いに影響を与えつつ今日も発展を遂げている。

建築家伊丹潤（1937-2011）は、在日韓国人というアイデンティティをもとに、生まれ育った日本で獲得してきた思想を根拠としながらも、韓国の文化に根付く思想を吸収しながら、独自の建築思想を確立してきた。設計活動を開始した 1960 年代後半には住宅に関連する書籍を 2 冊出版し、住宅のあり方について触れ、1980 年代には朝鮮の建築に関する書籍を 4 冊出版するなど、朝鮮の集落・民家に関して実際の踏査を踏まえた思想を綴った（表 1）。一方、自身の住宅設計の解説文などでは、現代の日本の住宅に関する思想に広く触れていることから、彼は住宅を、時代や国・文化の枠に捉われず思考し続け、

表 1 伊丹潤の住宅に関する書籍一覧

著者	書籍タイトル	出版社	発行年
庚龍伊 (伊丹潤)	小住宅建築のすべて	日東書院	1968
伊丹潤	明日のインテリア	日本文芸社	1969
伊丹潤	李朝の建築	求龍堂	1981
伊丹潤	朝鮮の建築と文化	求龍堂	1983
伊丹潤, 朱明德	韓国の空間	求龍堂	1985
伊丹潤, 西山武彦	韓国の建築と芸術	韓国の建築と芸術刊行会	1988

発展させることで、現代の我々に提示してきたといえる。

伊丹に関する既往研究は、日本と韓国に存在している。筆者らはこれまで入手可能な全言説を対象に、彼の思想を分析してきたが^{1~4)}、彼の住宅に対する言説に着目して思想を分析する研究は日韓ともに未だなされていない。

1.2. 研究の目的

“建築、とりわけ住宅へのアプローチに対して、私には李朝民家のたたずまいを欠くことができなくなっている。”⁵⁾ という言説が示している通り、伊丹の現代の住宅に関する思想が形成された原点には、朝鮮の集落・民家に関する思想が根付いていたとすることができる。

*1 神戸大学大学院工学研究科建築学専攻 助手・工修

Research Assoc. Dept. of Architecture, Graduate School of Engineering, Kobe University, M. Eng.

*2 神戸大学大学院工学研究科建築学専攻 教授・工博

Prof., Dept. of Architecture, Graduate School of Engineering, Kobe University, Dr. Eng.

*3 大手前大学建築&芸術学部 准教授・工博

Associate Prof., Otemae University, Faculty of Architecture and Arts, Dr. of Eng.

本研究は、彼が住宅を捉えた背景、また住宅にみえていた可能性を明らかにし、現代の建築界における住宅に関する思想に新たな視座を与えることを目的としている。

1. 3. 研究対象資料と研究方法

本研究では、現在入手可能な伊丹の全言説を分析対象として、まず彼の住宅に関する思想が表れている言説を抽出した。それら言説を思考の対象としている時代に関して大別したところ、[朝鮮の集落・民家]、[現代の住宅]の2項目に分類することができた。さらに各項目に含まれる言説に現れている思想を抽出し分類したところ、〈自然との関係〉、〈住まいの本質〉、〈形態と機能〉、〈空間構成〉の4項目に分類することができた。

第2章では、彼の[朝鮮の集落・民家]に関する言説について、項目別の言説の引用とともに考察を行う。

第3章では、彼の[現代の住宅]に関する言説について、[朝鮮の集落・民家]に関する思想を比較しながら、項目別の言説の引用とともに考察を行う。

第4章では、各項目の思想を取りまとめ、国や時代を越えた彼の住宅に関する思想について明らかにする。

2. 伊丹潤の[朝鮮の集落・民家]に関する言説

2. 1. 〈自然との関係〉

“韓民族の集落は単なる集合体ではなく天と地の基本理念に準じ、連結された合体であって、自然的なるものに抵抗して構えない有機体であった。”⁶⁾

伊丹が朝鮮の集落を絶賛する最も大きな理由が、〈自然との関係〉にあった。これは李朝時代に人々の精神の根底に存在した、自然を崇拝する儒教の精神の影響を、彼自身が捉えたものでもある。山々が集まりひとつの美しい風景をつくり出すように、民家が寄り集まってつくり出される朝鮮の集落の、自然の摂理に逆らうことなく、自然と共存するかのよう存在する姿に感銘を受けた彼は、集落を“構えない有機体”として称賛する。

“集落の個々の低い家屋の屋根の反りは、…個々に分断されている家屋の屋根のゆるやかな曲線は、周囲の山水と調和され、…一層の美しさを添えている。”⁷⁾

彼は、朝鮮の集落がその背景の自然環境と共存してみえる理由を、その“線”のうちに発見する。すなわち、山の稜線が連なる絶妙な曲線と、民家の屋根の美しいそりが連なることで流れるように形成される曲線とが、重層する美しさ、呼応する美しさをみえていたのである。

“厳しくもある自然の条件の中で、小ぢんまりと建てられ、…いかにも自然を自然らしく大事にしたかがうかが

がい知れる。”⁸⁾

彼は集落と同様に、それを構成する民家単体についても〈自然との関係〉を観察した。決して穏やかではない気候をもつ朝鮮の自然条件の中で、自然に対抗することなく“小じんまりと”存在する民家のたたずまいに着目し、その“自然を自然らしく大事にした”姿を称賛する。

また、民家はあくまで人工物であり、人間が創意工夫して作り上げてきたものであるが、彼にとってその創出者は、“自然”そのものであったことも読み取れる。また全ての形態が自然の流れ、意思に任されていたとする彼の思想には、儒教の精神の存在をみることが出来る。

“(李朝の民家を眺める) 私の視線は、まるで自然の景色を眺めるかのように、あちらこちらへと動いて定まらないのである。”⁹⁾

“なだらかな稜線を背景とする屋根の並ぶ線に美しさを見たり、小さな家そのものや、さらに家を構成する部分にそれを見つける。”¹⁰⁾

彼の視線は、朝鮮の民家の屋根を形成する部材ひとつひとつから、民家の“屋根”の曲線、それらが連なり生まれる曲線、そしてそれらと呼応する背景の山の稜線まで、スケールを変え自由に移動する。彼は、部分の美、全体の美、調和の美を同時に捉えることで[朝鮮の集落・民家]の形態の美をより深く考察していた。

“今日、私たちは住まいという言葉に出会ったときに、ただちに、宇宙や自然とかに照応するとか、それらに向けて開かれた窓として感得し得るであろうか。窓から見えるものは、小宇宙でもなく、自然の推移の光景でもない、何者かが収納される合理的、道具空間なのである。”¹¹⁾

彼にとって人間は、“自然”、そしてその全ての根源にある“宇宙”とともに存在すべきものであった。そのため、唯一人間の生活の場と外界をつなぐ“窓”という存在は、“宇宙”や“自然”に開かれるべきものであったのである。集落と同じく人間が集まり住まう共同体でありながらも、合理性や効率性が求められる今日の都市において、人間と外界を結ぶ“窓”から見えるものを彼は問うた。すなわち、人間が“自然”と今や接点を持たない存在になっていることを危惧していたといえる。

2. 2. 〈住まいの本質〉

“太陽の光のもとで周囲の自然と一体となっている集落に、住まうということ、つまり、人間としての存在、そして生というものを感ずる。”¹²⁾

前述の通り伊丹は、ひとつの風景の中で“太陽の光”

や山といった“自然”と一体のものとして認識される集落の姿に美を感じていたが、さらにその視点は人間単位にまで向けられた。“住まうということ”，そして民家における“人間としての存在”，さらにはその屋根に守られた“生”そのものをみたのである。彼は〔朝鮮の集落・民家〕の踏査をしながら、人間の“生”の本質と自然との根源的なつながりについて思考していた。

“住まう形には、民族の歴史や、作りあげた文化と深く関わっているはずである。¹³⁾”

“人間の営為としての暮らしや社会の原型が民家に表現され、その単純なそして素朴な形としての民家の構えや姿のなかに美しさというものを見つめていたい。¹⁴⁾”

彼は、朝鮮の民家に反映されているものには、“自然”だけでなく、人間の背景や根底にある“歴史”，“文化”，“暮らし”，そして“社会”があることを強調する。そしてそのような民家の姿を“素朴”と表現し、その中に美しさを発見した。すなわち、生活空間を考える上では、そこへ住まう人間の根底に流れるものを考慮する必要があり、そうして創出される人間の存在の反映がなされた生活空間こそが美しいということであろう。

2. 3. 〈形態と機能〉

“李朝の建築では、空間の開放と閉鎖は有機的な線上にあり、ひとつの意味で連結されている。¹⁵⁾”

伊丹は李朝の建築空間を、“開放と閉鎖”が同時に連続して発生する空間として認識していた。これは〈形態と機能〉についてであり、つまり形態としては“閉鎖”，機能としては“開放”された空間ということである。

“民家は、寒い冬に対応して…外部を遮断する構造である。しかし、自然とともにあろうとする工夫が各所になされている。¹⁶⁾”

厳しい自然から人間の生活を守るためにつくられる朝鮮の民家の形態は、一見すれば“外部を遮断する構造”を持つ、すなわち“閉鎖”されている。しかし機能の側面からすると“自然とともにあろうとする工夫”がなされている、すなわち“開放”されているとも捉えられる。

“一見外部を遮断するかのような外壁の作り方も、…実際には自然と人の暮らしがあるがままに一体となっている。¹⁷⁾”

朝鮮の民家の外壁に目を向けると、壁を建てるという意味では一見すると自然から“閉鎖”された形態であっても、その形態の根底には、自然と共存しようという、自然に“開放”された人間の精神が観察できるとした。

この概念は下記の通り“温突”のシステムにもみられ、

さらにそれは、空間の形態を“最小限”なものにする。

“今では、スチームなどにとってかわられた温突ではあるが、暖房を効率よくするために、部屋は小さく、窓も小さい。しかし、最小限の生活のためのスペースは、機能化され、その機能から発生する美が感じられる。¹⁸⁾”

日常的に使用する部屋に備わっている暖房システムとしての“温突”は、部屋全体に暖かさをもたらすとともに、床に直に座す生活文化を形成してきたとする。さらに座す文化は、部屋の形態を小さくするとともに、人々にとっての“最小限”の生活を可能にしたことを述べている。彼はそのような“最小限”の生活のための空間に、“機能”から発生する“美”を見ていたのである。

“李朝の民家には、…当然人の何らかの技術が加えられている。しかしそれは技巧をこらしたものではない。必要最低限の手が加えられているだけである。素朴な表現しかそれは持たない。¹⁹⁾”

“(民家の) 最小限の生活のための場合は、機能と合理に徹しているといえる。²⁰⁾”

彼は朝鮮の民家の〈形態と機能〉から得た要素を、“最小限”や“最低限”という単語に集約する。彼にとって民家は、自然に“最低限”の手の加えて作り上げられた生活の場であり、また“最小限”の生活を送るための場所であった。またそれは“最小限”の広さであり、装飾や造形はなく素朴に自然に寄り添っていたといえる。

2. 4. 〈空間構成〉

“人間の内と外の暮らしは一体のものであり、極言すれば、(民家の) 建物の外形は、内と外を有機的に結合した表現といえるだろう。²¹⁾”

伊丹は、人間の“暮らし”そのものが内外で連続するものであることを強調した上で、“暮らし”の環境となる朝鮮の民家の〈空間構成〉を、“内と外を有機的に結合”したものであると表現した。そして具体的な空間として、下記の通り民家における“板の間”を挙げる。

“釜屋(厨房)と房(温突室)に加えて、房と房の間に板の間が加わる。…人が集まったり夏の暑さをしのぐために用いられる。…内部と外部の両方がここで一体として使われるようになっている。²²⁾”

“温突”のシステムを持つ部屋が二つ並ぶ時、その間に“板の間”が設けられる。そこには屋根はあるが壁は部分的に取り払われ、内部にいながらにして外部と繋がることのできる中間領域である。内外で連続する暮らしにそのまま寄り添った、用途の規定されない空間である。

さらに彼は、朝鮮の民家の“屏”にも着目する。

“囲いとしての塀は、家を囲んでいながら、内と外を区分する一方、目の空間といえる視線をさえぎって別の空間をみせる。…自然と融け合おうとする思想の面で見るとき、…外部の風景を見渡す心をもつ。²³⁾”

本来“塀”は内部と外部を遮る機能を果たすが、彼は朝鮮の民家の“塀”を、むしろ外部の風景を見渡させるものであるとした。すなわち“塀”があることにより、内側にいる人は、視覚的にすぐ隣の風景は遮られるものの、知覚的には“塀”の手前の庭と遠くに広がる大自然をひとつながりのものとして感じ、別世界を想像できるのである。これは視覚的な“閉鎖”と知覚的な“開放”という意味において、〈形態と機能〉で述べた“開放と閉鎖”と重なる概念である。物理的にも精神的にも自然とともに育まれた朝鮮の民家特有の感覚であろう。

さらに彼は、朝鮮の民家における“舎廊”に注目する。
“韓国には、古くから、男の空間として、母屋に対して、舎廊というものがある。これは、書齋、応客、ときおり使用される寝室、つまり、男の修養、仕事、交わり、遊びの空間である。²⁴⁾”

母屋とは別につくられ、用途は不確定であり、その場面に応じてさまざまに用いられるこの空間との出会いは、後述の通り、彼の設計において大きな役割を果たす。

3. 伊丹潤の[現代の住宅]に関する言説

3.1. 〈自然との関係〉

“ありとあらゆる住宅は、なん等かの意味で自然と対立しているか、融合して建築されています。²⁵⁾”

伊丹は1969年の初期の段階から、[現代の住宅]における〈自然との関係〉を思考していた。

“でき得る限り、自然の中に、とけこみ、形も、自然にさからわない単純なものにした。²⁶⁾”

“背後の山が必ず視野に入るとともに、自然の中に入り込んだ構図。(64-1)”

「軽井沢の家(1973)」, 「張旭鎮邸・アトリエ(1986)」では、形態としての自然の調和が目指された。

“この傾斜地を逆に生かし、重層させながら連続する建築をと考えた。²⁷⁾”

「Oboe Hills (2010)」はソウルに設計された集合住宅であるが、斜面地の周辺環境に“重層”させることが意識された。“重層”とはまさに[朝鮮の集落・民家]の〈自然との関係〉において触れられた考え方である。

“生の空間とは、生の空をひたすらに問いかけ獲ちとれる空間である。窓が窓化し、視線が視線化したとき、

息づきの空間となり得る。²⁸⁾”

現代において都市の住宅を考える際にも彼は、[朝鮮の集落・民家]でみたように外部と内部とをつなぐ“窓”に注目する。観念の上ではあるが、自然と人間が繋がるべきであるとし、そのとき窓は“窓化”すると表現する。

3.2. 〈住まいの本質〉

“どの国でも同じであるのだが、建築の発生は住居の生成からである。²⁹⁾”

伊丹は建築の発生自体が、人間が生活を営むための“住居”の生成によるものであるとする。[現代の住宅]においても〈住まいの本質〉に思想の重点を置いていた。

“住まいの本質は、内部にあり、あらゆるものは時間を必要とし、そういう物のなかに生命は住みなし、住みつこうとする。³⁰⁾”

住宅設計から設計活動を開始した彼の建築思想は、〈住まいの本質〉に関わる思想から建築全体に関わる思想へと拡大する。彼にとっての〈住まいの本質〉とは[朝鮮の集落・民家]の思想で確認した通り、人間の存在の反映であった。しかし[朝鮮の集落・民家]におけるそれは、何百年もの時間をかけて実現された。したがって、〈住まいの本質〉は完成して即座に現れるものではなく“時間”の経過とともに発揮されるものであるとし、その思想を住宅の設計に活かそうとしたのである。

“住みなすなかで、生活の歴史の言葉が書き綴られていくであろうし、住みなすための余白、余白であるがゆえに、機能することによって、予期せぬ、実のあるものに出合う気がする。³¹⁾”

自邸である「余白の家Ⅱ(1981)」ではそのような空間を“余白”と表現し、未知の可能性を持つ空間とした。

“現代の中に伝統を再現する必要はまったくない。しかし、…住める家をつくるかぎり、住む人の心や暮らしざまを無視することはできない。単に合理的な発想だけでは家はつくれない。³²⁾”

“建築文化においても、画一化と個人の個性の上に展開しはじめている…しかし、住宅建築に関しては、住まいということを抜きにしては何もはじまらないと思う。そこには、それぞれの地方性と人々の暮らしざまがある。³³⁾”

彼は[朝鮮の集落・民家]の踏査・観察を原点として、[現代の住宅]を考えようとしたが、その際、“現代の中に伝統を再現する必要はまったくない”とした上で、[朝鮮の集落・民家]にみられる要素を抽出することで[現代の住宅]を捉え直そうとした。その要素とは、そ

の地の自然や文化や風土といった“地域性”と、そこに住まう“人々の暮らしさま”である。人間の利便性のために外部から完全に遮断するという考え方ではなく、また単に合理的な発想のみによって生まれるようなものではなく、まずはその地域というものを捉え、そしてそこに集まり住まう人の文化や暮らしを中心に据えたものを住宅とするべきだとした。多様な建築作品が現れる中で、住宅建築だけは、その本来の用途である“住まい”ということとその意義を忘れてはならないことを主張する。

3. 3. 〈形態と機能〉

“生活環境と生活意識は、まず平面で計画され、立体空間で表現されます。その中に機能的条件が含まれます。³⁵⁾”

初期に伊丹は住宅の設計プロセスについて、形態に対して“機能的条件”が考慮されるとした。具体的には、デビュー作とされる「清水の家（1971）」は造形的な形態であり、後から機能が入れ込まれたものである。

“形状は機能とはその境界を裁断し得ないし、形状はなんらかの機能を持ち機能はなんらかの形状を持つ。³⁶⁾”

“自然をでき得るだけ損なわないこと、…木造で単純な構造、自然に対するさからわない美学に徹した。…夏の空気のためには、通風のよい、大きめな開口部が用意され、冬のためには、ダクトを通した暖房とファイア・プレースが、この厳しい冬に耐えさせる。³⁷⁾”

「軽井沢の家（1973）」では、形態を“自然”と調和させた一方で、外部の気候に対応できるような設備を設けていることを強調する。[朝鮮の集落・民家]における“開放と閉鎖”の思想との共通点がみられる。

この言説からは、“形状”と“機能”の相互の深い結びつきを重要視する方向へ、態度の変化がみて取れる。造形主義的な考え方から、“機能”による美というものにも目が向けられるようになったといえる。

“この住宅での行為と意識には、造形主義に陥ることなく、また、確かなる造形とか、実体はなく、むしろ意識の中性化を試みたといってい。住み手と生活をギリギリに覆ったと言える中性的作品である。³⁷⁾”

“自然そのものを最小限の手を加えながら庭の一部とし、見据えていこうとする構えが、この建物にある。³⁸⁾”

「開かれた窓の家（1973）」、「張旭鎮邸・アトリエ（1986）」では、自らの造形意識を反映させるのではなく、“意識の中性化”，すなわち最小限にデザインするのみという態度がとられた。これは[朝鮮の集落・民家]の〈形態と機能〉でみた“最小限”の概念と重なる。

3. 4. 〈空間構成〉

“この朱色の立体を朱の塀で包み込み、都市住居への、ある効果つまり余白を演出しようとした。³⁹⁾”

「朱色の家（1980）」で伊丹は、一部建物を囲う“塀”を計画し、建物と“塀”の間の“余白”と表現する。「余白の家Ⅱ（1981）」においても“塀”が用いられ、その内側において母家と離れたところに自らの作業場を計画する。ここでは朝鮮の民家の“塀”の役割であった“別の空間をみせる”という思想が想起される。

さらに彼は[朝鮮の集落・民家]の〈空間構成〉に見られた、用途を限定せず可能性を残した空間を設けるという概念を現代に再解釈し、自らの設計に取り入れる。

“舎とは、室のことであり、意味空間のことである。廊とは、意味空間というよりも意味へ送りどける、送りどけの空間である。私は、ここで、舎と廊の一体化を試みた。私のいう舎廊構造である。⁴⁰⁾”

彼は“舎廊”という単語を解体し、“舎”を一つの行為のための“意味空間”，“廊”をそこへの“送りどけの空間”を表すものとして捉えなおした。“舎”と“廊”を一体化することにより、“歩く”行為から別の行為へと“送りどける”ための一つの空間、言い換えれば、各行為の持つ“意味”を“開く”可能性を持つ“舎廊構造”を、住宅作品において実現する。

“この著しく長矩形の1,2階の室は、舎と廊との意味と方位とを合わせもつ。⁴¹⁾”

“平面構成は…回廊的平面を実験し、廊即室としてみた。⁴²⁾”

“一切の間仕切り壁はなく、低めなキャスター付きの収納家具は、低く動く間仕切りの壁といえる。あまり限定された空間にはせず、限りなく抽象的な空間を目指してみた。⁴³⁾”

「墨の家（1975）」、「朱色の家（1980）」、「墨の庵（1998）」において、この“舎廊構造”が用いられた。彼は、可動間仕切りを用いることにより必要に応じて用途の変更が可能となるような“抽象的な空間”を目指したが、この操作の根底には、彼自身の朝鮮の民家における〈空間構成〉での体験があったといえる。

4. まとめ

本稿では、伊丹潤の[朝鮮の集落・民家]に関する思想と[現代の住宅]に関する思想について、項目別に考察を加えることで、それら思想の関係をみてきた。

〈自然との関係〉では、[朝鮮の集落・民家]におい

て周辺の自然の調和の美をみたように，[現代の住宅]においても敷地における自然環境との連続が意識された。さらに，[朝鮮の集落・民家]における人間と自然との接点となる“窓”への着目は，[現代の住宅]においてはその接点の喪失という危惧とともに再び繰り返された。

〈住まいの本質〉では，[朝鮮の集落・民家]における人間の存在の反映という本質が[現代の住宅]でも生かされた。[朝鮮の集落・民家]から人間の“生”，人間の根底に流れる“歴史”や“文化”や“社会”を住宅に反映させるべきであることを学んだ彼は，[現代の住宅]において，そのような人間の存在が反映されるために要する時間というものを意識し，“余白”という表現を選択した。設計段階において“地域性”と“人々の暮らし”の考慮が重視されることにより，住宅建築はあくまで“住まい”であることが意識され続けた。

〈形態と機能〉では，[朝鮮の集落・民家]において“開放と閉鎖”が連続的に発生していること，“最低限”の操作による“最小限”の生活の場を創出していることを導き出した。[現代の住宅]においても自らの設計において“開放と閉鎖”，“最小限”の概念が表れる。

〈空間構成〉では，[朝鮮の集落・民家]において“板の間”の半外部空間，視覚的に閉鎖されつつ知覚的に自然に開放される“塀”，“舎廊”における概念を習得した。[現代の住宅]においては，自らの作品に“塀”を試み，生まれた空間を“余白”と呼んだ。さらに舎廊空間を現代に応用した“舎廊構造”により，用途を規定することなく新たな可能性を開く空間が設計された。

以上のように，彼は〈自然との関係〉，〈住まいの本質〉，〈形態と機能〉，〈空間構成〉について，[朝鮮の集落・民家]の踏査を通じて詳細に観察を行い，独自の観点からその要素を吸収することで，[現代の住宅]を考え，自らの設計に生かそうとしたといえる。

“行き着こうとしている近代化の波のなかで私はある予感もちながら，韓国の集落の美しさを見る。自然風土，人間の暮らしとそして住まうということ。”⁴⁴⁾

彼は，現代の建築において喪失されつつあるものを，時代や国，文化や風土をも超越した視点によって取り戻すことを考えた。このような彼の思想は，固有性と普遍性の両者が必要とされる現代の建築のあり方を追究する上で，大いに参照すべきものであるといえるであろう。

参考文献

1) 後藤沙羅，末包伸吾，増岡亮：伊丹潤の言説における李朝に関する建築思想，日本建築学会計画系論文集，vol. 84，No. 760，pp. 1485-1495，2019

2) 後藤沙羅，末包伸吾，増岡亮：伊丹潤の言説における【韓】に関する建築思想，日本建築学会計画系論文集，vol. 85，No. 778，pp. 2795-2805，2020

3) 後藤沙羅，末包伸吾，増岡亮：伊丹潤の言説における【現代日本】の《自然》，《人間の精神》，《都市》に関する建築思想，日本建築学会計画系論文集，vol. 86，no. 786，pp. 2189-2200，2021

4) 後藤沙羅，末包伸吾，増岡亮：伊丹潤の言説における【現代日本】の《建築》に関する建築思想，日本建築学会計画系論文集，vol. 87，no. 799，pp. 1774-1785，2022

5) 伊丹潤：李朝民家の特徴，朝鮮の建築と文化，求龍堂，pp. 167-176，1983

6) 伊丹潤：土に帰る確かなもの，李朝の建築，伊丹潤，求龍堂，pp. 22-23，1981

7) 伊丹潤：土に帰る確かなもの，李朝の建築，伊丹潤，求龍堂，pp. 22-23，1981

8) 伊丹潤：石と光のそばで，韓国の空間，求龍堂，(ページなし)，1985

9) 伊丹潤：李朝民家の特徴，朝鮮の建築と文化，求龍堂，p. 167-176，1983

10) 伊丹潤：李朝民家の特徴，朝鮮の建築と文化，求龍堂，pp. 167-176，1983

11) 伊丹潤：集落のある風景，朝鮮の建築と文化，求龍堂，pp. 137-140，1983

12) 伊丹潤：集落のある風景，朝鮮の建築と文化，求龍堂，pp. 137-140，1983

13) 伊丹潤：韓の歴史と文化への視点，朝鮮の建築と文化，求龍堂，p. 143，1983

14) 伊丹潤：李朝民家の特徴，朝鮮の建築と文化，求龍堂，pp. 167-176，1983

15) 伊丹潤：閉鎖と開放，李朝の建築，伊丹潤，求龍堂，pp. 14-17，1981

16) 伊丹潤：李朝民家の特徴，朝鮮の建築と文化，求龍堂，pp. 167-176，1983

17) 伊丹潤：李朝民家の特徴，朝鮮の建築と文化，求龍堂，pp. 167-176，1983

18) 伊丹潤：李朝の民家，朝鮮の建築と文化，求龍堂，pp. 158-161，1983

19) 伊丹潤：李朝民家の特徴，朝鮮の建築と文化，求龍堂，pp. 167-176，1983

20) 伊丹潤：石と光のそばで，韓国の空間，求龍堂，(ページなし)，1985

21) 伊丹潤：李朝民家の特徴，朝鮮の建築と文化，求龍堂，pp. 167-176，1983

22) 伊丹潤：民家の形について，朝鮮の建築と文化，求龍堂，pp. 162-165，1983

23) 伊丹潤：淡泊で素朴な民家の塀，季刊銀花，文化出版局，pp. 67-68，1987

24) 伊丹潤：(「墨の家」の解説文)，新建築 1975 年 2 月号，新建築社，pp. 194，1975

25) 伊丹潤：よい住宅を建てるために，小住宅建築のすべて，日東書院，pp. 18-19，1969

26) 伊丹潤：(「軽井沢の家」の解説文)，ジャパン・インテリア 1973 年 7 月号，株式会社ジャパン・インテリア，(ページなし)，1973

27) 伊丹潤：(「Oboe Hills」の解説文)，1971-2011 伊丹潤の軌跡，株式会社クレオ，p. 395，2011

28) 伊丹潤：(「開かれた窓の家」の解説文)，新建築 1973 年 3 月号，新建築社，pp. 203-208，1973

29) 伊丹潤：住居の原点，李朝の建築，伊丹潤，求龍堂，p. 22，1981

30) 伊丹潤：わが自邸とその周辺，都市住宅 1981 年 9 月号，鹿島出版会，p. 8，1981

31) 伊丹潤：(「余白の家Ⅱ」の解説文)，都市住宅 1981 年 9 月号，鹿島出版会，pp. 14-15，1981

32) 伊丹潤：李朝民家の特徴，朝鮮の建築と文化，求龍堂，pp. 167-176，1983

33) 伊丹潤：李朝民家の特徴，朝鮮の建築と文化，求龍堂，pp. 167-176，1983

34) 伊丹潤：(「軽井沢の家」の解説文)，都市住宅 1981 年 9 月号，鹿島出版会，p. 77，1981

35) 伊丹潤：よい住宅を建てるために，小住宅建築のすべて，日東書院，pp. 18-19，1969

36) 伊丹潤：わが自邸とその周辺，都市住宅 1981 年 9 月号，鹿島出版会，p. 8，1981

37) 伊丹潤：(「開かれた窓の家」の解説文)，住宅建築 1976 年 9 月号，建築資料研究社，pp. 66-67，1976

38) 伊丹潤：(「張旭鎮邸・アトリエ」の解説文)，a+1987 年 10 月号，新建築社，pp. 73-78，1987

39) 伊丹潤：(「朱色の家」の解説文)，都市住宅 1981 年 9 月号，鹿島出版会，p. 82，1981

40) 伊丹潤：(「墨の家」の解説文)，新建築 1975 年 2 月号，新建築社，p. 194，1975

41) 伊丹潤：(「墨の家」の解説文)，新建築 1975 年 2 月号，新建築社，p. 194，1975

42) 伊丹潤：(「朱色の家」の解説文)，新建築 1980 年 2 月号，新建築社，pp. 222-227，1980

43) 伊丹潤：集落のある風景，朝鮮の建築と文化，求龍堂，pp. 137-140，1983